

狼オメガは愛しいアルファに溺れたい



ダイタ

ゲリンの初恋の人。
今は近衛騎士団の
団長をしている。

レイ

王弟妃マイネの
教育係を務める、
優秀な宰相補佐官。

ゲリン

狼獣人のオメガ。
ある日突然王弟から「番を作れ」と命じられるが
恋愛経験が乏しく絶賛悩み中。

カスパー

王弟ルシャードの
ひとり息子。
ゲリンに懐いている。

クラウド

普段は自身の宮に
引きこもっている、
芸術肌の王弟。

オティリオ

誰とても距離が近く
人懐っこい、
社交的な王弟。

Characters

プロローグ

目を閉じても瞼の裏に浮かぶのは、その姿だけ。

彼の指が、俺の首に巻いたネックガードにそつと触れる。

「はじめて見たときから、目が離せなくなつた。そばにいてほしい。愛してるんだ」

その声。その顔。その温かい手。その眼差し。

俺はゆっくりと告げる。

「俺が選ぶのは——ただだ。約束する。俺の帰る場所は——なんだろう。どこにいたって俺はその隣に帰るから」

オメガの番はただひとりで、生涯かけて番となつたアルファを愛し続ける。

「噛んでほしい」

そう言つて、俺はうなじを彼に向ける。

すると彼は鷹揚に頷き、俺のうなじに唇を寄せた。彼の歯がうなじに当たる。

俺に触れていいのは、ただひとりだけだ。

どこを触られても、粟立つように気持ちがいいのは、ただひとりだけ。

悶えて声が漏れるほど、身体が蕩けそうな快感に襲われた。

背中にすがりつくように腕を回すと、柔らかくて甘い唇が落ちてくる。

ずっとこのまま、そばにいてほしい。

他の誰とも違う、俺が選んだアルファ。

代わりなどいない。どうしようもないほどに、俺がその人物だけを望んだ。

俺は必死に、俺だけのアルファに手を伸ばす。

世界から音が消えた。

荒い息だけが耳の奥に響いて、頬に雫^{しずく}が落ちる。

ようやく手に入れられた。もう手放すことなんてできない。

「俺は——が好き」

ずっといつまでも、その瞳で俺だけを見続けてほしい。

俺が愛したアルファの名は——。

第一章 四人のアルファと狼オメガ

珍しく王弟ルシャードの執務室に呼ばれた日だった。

膨大な書類や書物を収めた大きな書棚が設置された広い室内を、アーチ窓から差し込む陽光が眩しいぐらいに照らしていた。

重厚な黒檀の執務机の背後、背もたれの高い椅子に男が鷹揚^{おうよう}に腰を下ろしている。黄金の人と評される麗しの王弟の獣の耳が、ぴくりと動くのを俺は眺めた。

聖獣の王ディークが統治するアンゼル王国は、獣人と人間という二種の種族が共存し、俺やルシャードは獣の耳と尻尾が生えた獣人だ。

獣人と人間の間に隔たりはなく、獣人が人間を差別することもなければ、反対に差別されることもない。

俺はどこにでもいる狼獣人だが、ルシャードは王家にしか現れない翼を持つ特別な『聖獣人^{せいじゆうじん}』であつた。

そんな貴重な存在である聖獣人——俺の雇い主が、挨拶も抜きに告げた言葉は無情なものだった。「——六年後、お前に番がいなければ、カスパーの護衛役をやめてもらう」

カスパーとは俺が護衛をしている四歳になる男の子だ。王弟ルシャードの実のひとり息子である

にもかかわらず、訳あって一か月前から王族に加わって王宮で豪華な生活を開始したばかりだ。

「はあ」

俺は気の抜けた返事をするしかない。またか、と思いながら。

この世界には男女の性別の他に、アルファとベータとオメガというバース性が存在し、十歳になるとすべての国民が血液によるバース検査を行い、自身のバース性を知ることになる。

秀でた知力体力に恵まれたアルファ、凡庸で一番数の多いベータ、希少なオメガ。三か月周期で発情期が来るオメガは、媚薬のようなフェロモンでアルファを誘惑する厄介な体質で、男でも直腸の奥に子宮があり、出産が可能だ。

俺は、そんなオメガだ。

男オメガであることが判明してから、何度、失望したかわからない。だから、ルシャードの言葉を受けて思ったのだ。

またオメガだからという理由で、諦めないといけないのかと。

「それが嫌なら、誰かと番になれ。カスパーが十歳になったとき、未熟なアルファの近くに発情するオメガがいることがどんなに危険かわかるだろ。間違いがあつては困る」

番とは、アルファとオメガにのみ結ばれる契約で、オメガのうなじを噛む行為によつて成立する。オメガは番になったアルファにだけ発情し、唯一無二の存在となるのだ。

ルシャードの発言は正しく、十歳を過ぎた獣人はほどなく獣型に変化できるようになり、本能が目覚める。経験上、俺も知っている。

俺が黙っていると、闇のような黒衣を着用したルシャードは無表情で続けた言った。

「幸い王宮にはアルファが多いことだし、六年もあればなんとかなるんじゃないか？」

六年という期間が短いのか長いかわからないけれども、三十年間生きてきて、未だに番どころか恋人もない俺にとっては、たぶん短いんじゃないだろうか。アルファは優れた才能の持ち主や高貴な身分に多いため、出会う機会が少なかったからだとも言えなくはないが。

ルシャードが返事待つように口を閉じたため、俺は無駄な抵抗を試みる。

「薬師のリサはアルファですが、ベータと結婚したため番はいません。俺がアルファ以外と結婚した場合、番になるのは不可能ですが、その場合はどうしますか？」

オメガとベータが愛し合つてうなじを噛んだとしても、番にはなれない。

するとルシャードが小さく息を吐いた。

「……狼はアルファが嫌いかな？」

「好きでも嫌いでもありません。可能性の話をしてるだけです」

「それなら、アルファから選べばいい。ああ適当に選ぶなよ。マイネが悲しむようなことはするな」

「はあ」

俺の考えを読んだかのようにルシャードが忠告した。

ルシャードの妃である男オメガのマイネは俺と旧知の仲で、カスパーが産まれて間もない頃から知っていた。カスパーの護衛を俺に依頼したのもマイネだ。

しかし、どうしたものかな。

六年後、俺に番がいなければ、一番多感な時期のカスパーを誘惑するかもしれないと考え、自分のオメガのフェロモンに嫌悪する。

ルシャードに言われなくても、わかっているさ。

「話はそれだけだ。下がっていい」

番であるマイネを愛するときとは別人のような、傲慢で冷淡なルシャードだった。

ルシャードが顔を机に向けたところで、俺は退出するためにくりりと踵^{きびす}を返す。しかし扉を開けると同時に、再び呼び止められてしまった。

ばつが悪そうにルシャードが口を開く。

「この話はカスパーとマイネには知られるな。よいな？」

「はい」

俺は素直に頷いて執務室をあとにした。

マイネが聞いたらどんな反応をするのか、ルシャードにはわかっているのだろう。怒るか悲しむか、どちらかだろうな。

六年後か。俺に番がいる想像はできないけれども、このままカスパーの護衛を続けたい。

誰でもいいかと思つて、試しにルシャードで想像してみたら、ぞつとして虫唾^{むせう}が走った。誰でもいいわけじゃなさそうだ。

番を作れと簡単に命じたルシャードは、当然アルファだった。

俺はオメガにしては身長が高い。女のような容姿で、意志の強そうなくつきりとした目元や丸みを帯びた口元は美しい部類に入らしい。陶器のような肌の下には日々の鍛錬によって引き締まった筋肉が隠され、男女問わず褒められる外見をしている。

だからって、アルファのひとりやふたり、なんとかなるだろうって誤解されては困る。

本当に困るのだ。未だかつて、番になるほど深く愛し合う関係になったアルファなどいないのだから。

誰にも聞こえないほどの小さなため息をつきながら、青い絨毯が敷かれた廊下に足を踏み出す。執務室のある政務宮の廊下は非常に広く、小さめながらも中央にクリスタルのシャンデリアが吊るされるほど天井も高い。

その廊下の向こうに秘書官ハンの姿があった。四十過ぎの四角い顔の人間で、十年以上もルシャードの公務を支えてきたベータの男だ。

そのハンの隣にいる男と、目が合った。黒眼鏡をかけたオリーブ色の瞳を持った文官だ。

政治を行う中枢である政務宮では、制服を見れば文官か武官か一目でわかるようになってい

る。制服の上着の丈の長さや色の違いで見分けがつくからだ。

どちらの上着も緩やかで軽量な作りになっており、武官の制服は、ダークブルーで裾の長さが腰丈であるのに対して、文官の制服はダークグレーで裾の長さが膝丈だった。

それから、その上着の上に裾がたつぷりとしたマントを羽織っている。耐久性もあつて動きやすく、何より着心地がよかった。

「新しく入った護衛の方ですよ？ はじめまして、宰相補佐官のレイ・キルヒアイスといいます」

薄い唇の間から発せられる男の声は、耳あたりのよい低音でしっとりとしていた。見た目は三十歳前後だろうか。

口角を上げて笑ったつもりのようだが、眼鏡の奥のオリーブ色の目は全然笑ってない。言葉も表情も優しいのに、どこことなく近寄りがたい印象だ。

さらに知りたくもないのに、フェロモンでアルファだとわかってしまう。

難関試験に合格した者のみに許される狭き門の政務宮文官は、地位のある役職であればあるほどアルファが多い。

——王宮にはアルファが多い。

先ほどのルシャードの言葉が頭をよぎった。

「金ノ宮の護衛の任務をしております、ゲリンです。よろしく願います」

俺が挨拶を返すと、レイは軽く会釈をした。

「ルシャード殿下のご子息と一緒にいるところを、何度かお見かけしたことがあります。以前からご挨拶できたらと思っていました」

「……そうでしたか」

王宮で働くオメガは極端に少なく、文官にも武官にも存在しない。好奇心な目で見られても仕方がないとはわかっていたが、まだ慣れない。

レイにも悪気はなく、珍しいオメガに目を向けたただけだろう。

ハンが間に入って、言い添える。

「レイ様は補佐官と兼務で、マイネの妃教育ききょうをしてもらうことになったんだ」

「妃教育ですか……」

はじめて聞く言葉に、俺は首をひねった。

「マイネも王族の仲間入りだからね。徐々に公務をしてもらうことになるからさ」

「金ノ宮で教えるのですか？」

王宮の奥には王族の住まいとなる宮がいくつか点在し、金ノ宮はその中のひとつだ。

金ノ宮は王弟ルシャードが所有する宮で、政務宮とは渡り廊下で繋がった比較的近い位置にある。住み込みという形で雇用されている俺も、金ノ宮に自室を宛てがわれていた。

「そのつもりです。何かとゲリンさんともお会いする機会がありそうですね」

俺はその言葉に頷いて応えながら、こっそりとレイを観察した。

実直そうな奥二重の切れ長の目とすっきりとした鼻筋。文官らしくないしつかりとした身体と、

物腰の柔らかさを備えている。

硬そうな黒髪は、シンプルながらも落ち着いた雰囲気を引き立てて清潔感があった。

番を探せと横柄に言ったルシャードが、マイネの妃教育ききょうに選んだアルファか。それってルシャードのお墨付きってことだよな。

俺の番としてもびったりなんじゃないか、と勝手に考える。

しかし、あのルシャードが番のいないアルファをマイネに近づけるとも思えない。すでに番がいるのかもしれない。オメガならうなじに齒形があれば番のいる証拠になるが、アルファにはそういった印はどこにもない。

「来週から金ノ宮に行きます。どうぞよろしく」

レイはそう言うのとハンに頭を下げ、「それでは失礼」と背中を向けて去っていった。

姿勢のよい後ろ姿を見送りながら、俺は何気なくハンに訊いた。

「あの人、アルファですよ？ 既婚者ですか？」

「違うよ。……ああ、ルシャード殿下の許しが出たのが不思議？」

「はい」

ルシャードはオメガの俺にすら敵意を向けるほど番に執着している。それなのに、番のいないアルファを、そばに置くなんてことがありえるだろうか。

「まあね、殿下は既婚者の私にだって嫌な顔をするからね。レイ様は来月に結婚が決まってるし、マイネのためになりそうな能力の高さで選んだのだと思うよ」

なんだ婚約しているのか。それほど落胆したわけではないけれども、ほんの少しだけ残念に思った。

「授業の間は部屋の中に侍従を控えさせて、ふたりきりにはならないようにするしね」

「そうですか。それにしても生真面目そうな人ですね」

「有能な方だよ。二年前に、まだ二十八歳の若さで宰相補佐官になられたんだから」

「それじゃあ、俺と同じ三十歳ですか」

読みは正解だったようだ。

その後ハンと別れ、渡り廊下を通って金ノ宮に戻る。

庭師の手で綺麗に刈り込まれたヒイラギの葉が生い茂り、それは隙間なく金ノ宮の正面玄関まで続く。

石造りの列柱アーチが特徴的な金ノ宮は、重厚でありながら柔らかな印象を覚える。開け放たれた豪華な両扉をくぐると、吹き抜けで広く明るい八角形のホールが目に見え込んできた。

涼しげな白い大理石の床は、いつも綺麗に磨かれ、自身の靴が汚れてないかと心配になるほどだった。

その中央で、侍従長である兎獣人のジョイが、綺麗な姿勢で出迎えてくれた。

「ああ、ゲリン、おかえりなさい。迷子にならなかったかい？」

王宮に仕えるすべての侍従と侍女は、黒のベストと黒の下衣の制服を着用して、どここの宮に属しているのか白シャツの首元に巻かれたスカーフの色で区別されている。

ルシャードの宮を示す金色のスカーフを巻いたジョイは俺の教育係で、当初から何かと世話になっていた。

三十四歳のベータのジョイは、俺よりも若干背が低い。長い耳と短い尾の可愛らしい外見とは裏腹になかなか礼儀に厳しい男で、王弟妃に敬語を使わない俺にはじめは難色を示したものの、マイネが何か言ったのか、今では注意しなくなった。

「大丈夫です。戻りました」

「王宮の中は広いですから、慣れるまで大変かもしれません。カスパー様が迷子にならないように、できるだけ早く覚えてください」

「はい」

「カスパー様はマイネ様と一緒に、中庭で過ごされています」

俺は教えられた中庭に向かった。

タイル張りの正方形の中庭は、中央に人工の小川が流れていて、心地のよいせせらぎが聴こえる。カスパーとマイネは、卵のような曲線の籐とうの椅子に座っていた。

ルシャードに似たカスパーが、頬を膨らませて楽しそうにお菓子をもぐもぐと食べる様子に癒される。自覚はなかったが、ルシャードとの会話に緊張してストレスを感じていたようだ。

マイネが「おかえり」と俺に顔を向けた。カスパーの父親でルシャードの伴侶であるマイネは、癖のある鳶色の巻き髪と董色の瞳をした男オメガの人間だ。瞳と同じ董色のブラウスがよく似合っていた。

「どこ、いつてたの？」

頬を膨らませていた菓子を飲み込んだカスパーが口を開く。

輝く金色の髪と瞳に、表情豊かな愛くるしさをそれぞれの親から受け継いだ、末恐ろしい獣人。四歳のカスパーは、まだ獣の耳と尻尾があるだけで獣型に変化はできないが、紛れもなく王族だけに出現する聖獣人だ。

聖獣の耳は、幅広い三角形で先端の毛が少し長いという特徴がある。

俺の耳が細長い三角形で尖って上向いているのにくらべると、カスパーの左右の耳はわずかに離れていて、先端が斜め上を向いていた。

膝の上にふさふさの尻尾を乗せたカスパーは、寛くろいでいるようにゆらりと揺らす。カスパーと俺の尾は比較的长度、長毛で覆われている。

あと六年もすれば、王族の血を受け継ぐカスパーは聖獣の獣型に変化できるようになり、背中には特別な翼が生えるのだ。

「ルシャード殿下の執務室に行ってた」

「なんの話だった？」

マイネに訊かれて内心焦ったが、悟られないように、空いている椅子に腰を下ろす。

「今後について……あ、マイネの妃教育ききょうを担当する人に会った。来週から来るらしいな」

「うん。妃教育ききょうがはじまる。事務官をしたから、王族の行事に関しては知ってるつもりなんだけど、王弟妃の義務とかはわからないからさ」

聞いた話によると、五年前、マイネはルシャードの事務官として王宮で働いていたらしい。

本来ならばオメガのマイネは事務官にならないが、オメガであることを隠してベータと偽っていたそうだ。

「マイネは事務官をしたとき、一度もオメガだと疑われなかったのか？」

誰が見ても、マイネの容姿はオメガらしく、華奢で中性的なはずだ。

よく騙せたなと感心していると、マイネは自嘲気味に笑った。

「疑われなかったよ。俺なんかどう見てもベータだろ」

どうも発情期がなかった頃のマイネは、今よりも平凡で、どこにでもいるベータのような外見だったらしい。

カスパーを出産したことによってオメガらしい容姿に変貌し、さらにルシャードに愛されるようになったことで美しくなった。

「ルシャード様だけは、すぐに俺がオメガだつてわかってたみたいだけだな」

そう言ったマイネは、幸せそうに首を触った。

癖のある巻き髪のマイネのうなじには、齒形の痕が浮かんでいる。

それはルシャードとの番の証だった。

++++

狼獣人の俺は幼い頃に親に捨てられ、親の記憶はない。俺の記憶は王都にある孤児院からはじまっている。

ルシャードの叔父が支援する孤児院で、三十人ほどの子供たちと一緒に暮らして成長した。

剣技を覚えてくれたのは、視察に来た王弟と王弟妃を護衛する近衛騎士たちだ。

俺は、目に見えてめきめきと腕を上げた。

将来騎士団に入隊しろ、と盛んに言われたが、十歳のバース検査でオメガだとわかった、騎士たちは揃って口を噤んだのをよく覚えている。

「なぜ俺が！」

悔しかった。

何度も何度も己を罵倒した。

それでも腐らずに鍛錬はやめなかった。

オメガの身体は筋肉がつきにくく、どうしても力で圧倒されてしまう。だから、俺は俊敏な長所を活かした戦い方を覚えた。

十六歳で忌々しい発情期が来ると孤児院にいらなくなり、王都でひとり暮らしをはじめたが、二十歳のときに諦めきれずに騎士団の試験を受けた。

結果は一次試験で落ちた。当然の結果だ。

ところが、なぜかアプト領主所属の護衛になれる推薦状をもらい受け、王都から遠く離れた北部に移り住むこととなる。

そこで出会ったのが、のちにルシャードの妃となるマイネだ。

マイネはアプト領主が経営するオメガ病院でカスパーを出産したばかりだった。その後、彼も領主に雇われることとなり、同じオメガである俺は進んで子育ての手助けをした。

当時のマイネは事情があつて、カスパーの父親であるルシャードから身を隠し、まだカスパーが王弟の子だとは誰も知らなかった。

一方で、突如姿を消したマイネを懸命に捜し続けたルシャードの執念により、ふたりは四年半ぶりに再会を果たし番となった。

ふたりは運命で惹かれ合ったオメガとアルファ。運命の番と呼ばれる魂の半身のような存在だ。そんなマイネとルシャードの関係に、俺は密かに憧れを抱いている。俺だけじゃなく、オメガならば誰でもそうだろう。

それはオメガの本能なのかもしれない。

運命の番とまでは言わないから、いつか深く愛し合う俺だけのアルファと番になりたい、と思っ
てしまうのは。

「番か……」

カスパーの護衛として、九年ぶりにアプト領から王都に帰ってきた俺は、孤児院育ちには不似合
いすぎる不慣れな王宮の贅沢暮らしをはじめたばかりだった。

++++

金ノ宮の裏手には広い庭園があり、ヒイラギの生垣とともに鬱蒼とした木々に囲まれている。

その目隠しの役割を担うブナの木の下で、カスパーは白いブラウスが汚れることなどおかまいな
しに、地面に転がるドングリを夢中で拾い集めていた。

王宮内で襲われる可能性は低いが、ゼロじゃない。どんなことがあっても対応できるように、俺

はカスパーの傍らで見守った。

ドングリを探しながら、裏手から徐々に移動する。政務宮に続く渡り廊下の近くまで来ると、正
午の日差しから遮るものが何もなく、俺とカスパーの影が地面に映った。

そのとき、こちらに向かってくる人影に気づく。ルシャードの弟のオテイリオだ。

微笑んでいるかのように目尻が下がった大きく丸い碧眼と、自然と口角が上がった愛嬌のある容
姿は、ルシャードには劣るものの一般的には整っていると言えるだろう。

肩上で切り揃えた柔らかなような銀髪は、人間の特徵である小さな耳に片方だけかけていた。

オテイリオはマイネと同じ年齢だったはずだから、俺の二歳年下の二十八歳。金ノ宮とはかなり
離れた場所にある銀ノ宮を所有しているが、国王の側近になってからは、政務宮での仕事の合間に
ふらっと金ノ宮に寄ることが増えた。

痩身な身体に文官の制服を身につけた彼は、俺を見つけるなり、ぐんぐん歩みを速め、勢いよく
俺の手首を掴んだ。

「ゲリン！ お前、発情期じゃないのか？ 匂いが漏れてるじゃないか！」

オテイリオは同じ王弟であるルシャードとは違い、身分差を感じさせず、誰にでも図々しくて距
離感が近い。

「朝、抑制剤を飲んだので、問題ないはずですが」

俺は素っ気なく答えた。

今日、目覚めると同時に、三か月に一度の発情期の予兆があり、舌打ちしながら抑制剤を服用し

たばかりだ。前職が保護病棟もあるオメガ病院だったからか、発情期だから仕事を休むという発想はない。

オメガにとって職場が一番安全な場所だったし、抑制剤が効きやすい体質のため、発情期でも少し身体が熱いぐらいで不自由がなかったからでもある。

「抑制剤を飲んだからって、アルファにはオメガの甘い匂いがわかるんだよ。覚えておけ。むやみに、僕に近寄るな」

近寄って手首を掴んだのは、お前だろうが。俺は深いため息をついた。

「大丈夫です。オティリオ殿下なら、襲われても倒す自信がありますから」

手のひらを剥がし、ぞんざいに放ると、彼は心外だとばかりに口を尖らせた。

「ゲリンに敵わないのは認めてやつてもいいけど、そもそも僕がお前を襲うことはないからな」

「じゃあ、いいじゃないですか」

「そういう問題じゃないんだよ。お前がいたアプト領とは違って、王宮にはアルファがうじゃうじゃいるんだからな。今日は金ノ宮から出るな。僕が送ってやる。カスパー、帰るよ」

オティリオは、オメガよりもベータが好きという、アルファらしくないアルファだ。

婚約者を決めずに節操のないときもあつたらしいが、片想いを拗らせてからは遊び回ることもなくなった、と聞いてもないのに本人から教えられた。

その片想いの相手が兄の妃となったマイネだということも知っている。今でも好きなのかは知らないが。

カスパーの濃紺のタータンチェックの半ズボン、左右のポケットに小さなドングリが詰め込まれて歪に膨れ上がっていた。カスパーはまだ地面に目を向けているが、どう考えても、もう入らないだろ。

結局、カスパーはそれ以上ドングリを詰め込むのを諦めて、オティリオと手を繋いだ。

俺は三歩後ろからふたりの会話を聞く。

「カスパーはドングリを拾ったのか？」

「うん。いっぱい」

尻尾を左右に振りながら歩くカスパーのポケットから、一粒どんぐりがこぼれ落ちた。

「政務宮の裏のほうに行くと、マツボックリも拾えるよ」

「それも、ひろいたい」

「また今度、教えてあげる」

「いっしょに、サンドイッチ、たべる？ おひる、おとうさん、つくってるの」

カスパーが呼ぶお父さんとは、マイネのことだ。

「食べたいけど、僕の分はないんじゃないかな？」

「おとうさんの、サンドイッチ、おいしいよ」

「ルシャード兄上に怒られそうだし……」

金ノ宮の正面玄関に着くと、オティリオは再び俺に向き直ってわざとらしく顔を顰めた。

「ゲリン、発情期が終わるまでは外に出るなよ。お前は外見だけはいいいんだからね。わかったか？」

「問題ありません」

「はあ？ 問題あるって、素直にわかったと頷いとけよ」

オティリオが呆れ返ったような声を上げた直後、マイネが奥の廊下から玄関ホールに現れた。

「どうかしましたか？ 何か揉めてるようすけど」

マイネがそう言うと、オティリオの表情がわかりやすく柔和になる。

俺とマイネに対する態度の差が兄弟揃って似ている。ルシャードのほうが極端ではあるが。

「マイネ、聞いてよ。ゲリンが発情期なんだよ」

その言葉に、マイネは俺の顔を覗き込んだ。オメガとベータには、発情期特有のフェロモンの匂いがわからない。

「抑制剤は飲んだ？」

「飲んだ」

「ゲリンは飲んだから問題ないって言うんだけど。アルファにはわかるからね。発情期の匂いは完全には消せないし、隠せない」

「ネックガードもしてるし、大概の奴なら倒せる」

苦渋の表情を浮かべたオティリオに、俺は自分の首を守る黒く頑丈なチョーカーを見せる。オメガは誤ってアルファにうなじを噛まれないように、このようなチョーカーで自衛するのだ。

「ゲリンが強いのはわかってるけどさ。それでも何かあったら心配だから、金ノ宮からは出ないでほしい。カスパーもゲリンが怪我したら、いやだろ？」

マイネが言うと、カスパーは鮮やかな金色の瞳を俺に向けて「うん」と頷いた。

ほらな、とオティリオから無言の圧を感じる。王宮での生活は、今までの習慣を改めないといけないらしい。

抑制剤さえ飲めば、発情期中のオメガのフェロモンを嗅いでも、大概のアルファなら理性が保てるし、反対もまたしかりだ。現に俺の本能はオティリオのアルファを欲しているが、抑制されて反応は鈍く、後孔が疼くというほどではない。

しかし三人からの視線を受けて、俺はため息をついた。

「——わかった……金ノ宮から出なければいいんだな」

孤児院を出てひとり暮らしをしていた十六歳の俺が、安価な抑制剤しか買えずに悶え苦しんでいた頃にくらべたら、今の状況ははるかに快適だというのに。

そんなことを思ったからだろうか。

ふと、はじめて発情期とともに過ごしたアルファに、一か月前に再会した記憶が蘇った。発情期ごとに寝るだけで、恋人になることもなく終わった彼に、俺は再会したばかりだった。

王宮で暮らすと決めたときに、王族のダイタと再会するのは必然だった。

+++++

一ヶ月前、マイネたちとともにアプト領から王宮に移った日。

王弟の婚姻を祝う宴が金ノ宮の庭園で行われ、参列した近衛騎士の中に騎士団長のダイタもいた。ルシャードと従兄弟^{とこ}同士のダイタが、婚姻を祝うのは当然だ。

「ゲリンなのか？」

再会したとき、ダイタは俺を見てそう呟いた。ダイタの低い声が俺の名を呼ぶのは、何年ぶりだろうか。

「はい。久しぶりです」

俺は腹に力を込めて、震えそうになる声をなんとか制した。

九年ぶりに見るダイタは、昔より大人の色気をまとい魅力的だ。聖獣の耳が生えた特徴的な炎のような赤い髪を短めに整えて、俺が知っている姿のままだった。

角度がついた逞^{たくま}しい眉は男らしく、その奥の漆黒の瞳には不思議な優しさを湛^{たた}えている。鼻はまっすぐと高く口元も整っており、どこか品のある独特な深みがある。

頑固で厳格そうな力強い目鼻立ちの容姿に反して、柔軟な思考の持ち主だ。存在自体が強烈に周囲を惹きつけて、誰もが近づきたくなるような魅力に心を奪われてしまう。俺も、そのひとりだった。

心の奥がちくちくと痛み、その痛みが思ったほどではなくて安堵する。

もう結婚して子供がいてもおかしくない年齢だ。どうなのだろうか。

ダイタは濡れた黒曜石のような色の目を細めた。俺が好きだった色だ。

「お前、変わらないな」

最後に会ったのは俺が二十一歳の頃なのに、ダイタの目には昔と変わっていないように映るらしい。いくらなんでも三十の俺が変わってないはずない。九年も経つのだから。

「それでもいいです」

「驚いた。まさかゲリンに会えるなんて思ってたぞ。アプト領のオメガ病院で護衛してたんだろ？」

「そうです」

「まさかゲリンとマイネちゃんが知り合いだったとはな。マイネちゃんとはオメガ病院で知り合ったのか？」

彼は王弟妃をマイネちゃんと親しげに呼んだ。

「はい」

「すごい偶然があるもんだな。元気にやってたか？ 今度、ゆっくり聞かせてくれよ」

ダイタが屈託なく笑う。

距離感がわからない。馴れ馴れしいと思われなくなかった。

俺がいた孤児院を支援をしていた王族——ルシャードの叔父とは、ダイタの父親だ。

父親に連れられてダイタも孤児院の視察に顔を出すことが多く、五歳違いの俺と親しくなるのに時間はかからなかった。

「ダイタ様に聞かせるような出来事は、何もなかったです」

「どうした？ 他人行儀だな。以前は俺に敬語なんて使ってなかっただろ」

その通りだ。丁寧な言葉遣いができなかった孤児の俺に、王族のダイタは一度も直せと言わなかった。

「カスパールの護衛なら近衛騎士と連携することもあるだろ。これからよろしくな」

「はい。よろしく願います」

「その制服、似合ってる」

騎士団長のダイタも同じ武官の制服だ。当たり前だが、俺なんかよりも数倍様になっている。

俺は聞こえなかったふりをしてダイタから離れた。

王宮に行けば、いつかダイタに再会するだろうとは思っていたが、こんなに早く出会うとは予想外だった。

会いたくなかった。……いや会いたかった。

相反した複雑な気持ちで胸の奥で騒ぎ、鼓動が速まったまま鎮まらない。

期待をするな。そう自分に言い聞かせる。

ダイタは、発情期を過ごした唯一のアルファだった。

恋人ではなく、ただ発情期の熱を取り除くだけの相手でしかなかったが。

まだ発情期の苦しさ慣れずにどうしていいのかわからなかった十八歳のとき、ダイタの腕にすがってみつともなく抱いてくれ、と言ったのは俺のほう。

当初は、発情期の治療ぐらいにしか考えてなかった。

うなじを噛まれないようにネックガードもしていたし、妊娠しないようにもしていた。

しかし嫌いな相手に頼むわけがない。誰でもいいわけがない。

発情期のときだけ肌を合わせる関係は、その後、二年半以上も続き、どうしようもなくダイタに情が湧いてきた頃、俺の恋心はあっけなく粉碎した。

「近々、婚約を発表する」

そんな言葉を聞いたとき、息が詰まった。

確かに俺たちは恋人ではない。

二年半以上の間、好きだと言われたことは一度もなければ、言ったこともない。それなのに、愚かにもダイタとの関係はずっと続くと思っていた。

「……誰と？」

「いとこのエリーゼと」

「そうか。あつ、おめでどう」

俺が感情を押し殺して祝いの言葉を贈ると、ダイタはさっと目を逸らした。悲痛な胸のうちを俺が隠しきれてなかったからかもしれない。

「結婚はまだ先の話なんだ。決まったら教えるよ」

——裏切られた。

身勝手なそんな想いと、発情期を過ごしたオメガの存在なんて邪険にされるのではないかという恐怖心から、婚約したダイタを避け続け、それから半年ほどともに会わない日が続いた。

そしてそのまま何も告げずに、俺はアパート領に移住した。

その後、ダイタと婚約するはずだったエリーゼの死去を知るわけだが、もうどうすることもできなかった。

アプト領にいた九年間、ずっとダイタに会いたかった。

いつか、ダイタが会いに来てくれるのではないかと甘い期待なんかもしていた。

だからマイネを追ってルシャードがアプト領に現れたとき、心底羨ましかった。

ふたりに自分たちを重ね合わせたりもした。

しかし俺とダイタは、マイネとルシャードのように運命の番ではないし、本気だったのは俺だけ。……ダイタは少しでも俺のことを、思い出したりしてくれただろうか。

その答えを求めるように、いくつもの大皿料理が並ぶ立食形式の宴を密かに見渡すと、遠くのほうからダイタの声がして、聞くつもりはなかったのに、まだ結婚してないとわかってしまった。複雑だった。

もし結婚していたら、きつぱりさつぱり諦めもついたはずなのに。

++++

数日後。

護衛の任務が終わった俺が調理場に夕食を取りに行くと、侍従長のジョイに呼び止められた。

「急ですが、今日は夜勤もしてくれませんか？」

夜間は近衛騎士が交代でカスパーを警護するため、俺の護衛は必要ない。

「どうかしましたか？」

俺が訊くと、兎獣人のジョイは長い耳を忙しく動かした。

「ルシャード殿下が珍しく早く帰宅されて、今夜はマイネ様とふたりで過ごされたいと……近衛騎士はふたりのそばについてしまうので、カスパー様を預かってくれませんか？」

「ああ、なるほど」

俺は曖昧に頷いた。

「明日は、ルシャード殿下が休みを取られてカスパー様とマイネ様を連れて外出なさるそうなので、休んでかまいません」

「わかりました」

了承してジョイと離れると、夕食のトレイにレモン水とカトラリーも載せて自室まで運ぶ。普段、食事は自室でひとりで摂ることが多い。

俺の自室は本来客間だったところで、カスパーの部屋にほど近い。寝台と机は簡素だが、オメガの発情期を配慮したのか、洗面所とお手洗がある設備が行き届いた部屋だった。

うつすらと暗くなりはじめた部屋にオイルランプを灯すと、温かみのある光によって灰色を帯びた白い壁と高級そうな床板が浮かび上がる。

今日のメニューは、揚げた白身魚と具沢山スープとチーズパンだった。

食事を終えて食器を返却したあとカスパーの部屋に向かうが、まだ早すぎたようで誰もいない。

壁と天井とカーテンの色が水色で統一された、明るい雰囲気の子供部屋。カスパーの身長に合わせた木製の本棚や天蓋付き寝台、勉強机と椅子が揃っていて、どれも繊細な彫刻が施されていて高級そうだ。

出窓の外は太陽がすでに完全に沈んでいた。しかし銀製の輪っかのようなシャンデリアが点火され、室内はほのかに明るい。

本棚から絵本を取り出してページを捲^{めく}って待っていると、廊下を走る小さな足音が耳に入った。

「ゲリン！ フクロウ、みたい！」

カスパーが扉を開けるなり言い募^もった。背後の尻尾が激しく左右に揺れる。

「梟^{ふくろう}？」

「おうきゅう、すんでるって。ちちうえ、おしえてくれた。ゲリンと、さがして、いいって、いわれた」

マイネとふたりだけで過^{すご}すことへの罪滅^{つみ}ぼしなのか、ルシャードは王宮に巣を作った白い梟^{ふくろう}の話をカスパーに伝えたらしい。

「今からか？」

「そう！ フクロウ、よるしか、うごかない。ちちうえ、いった」

それで俺たちは、ジョイに梟^{ふくろう}のいる詳細な場所を訊ねてから、ランタンを手にして金ノ宮を出た。白い梟^{ふくろう}は、王宮の西にある森に面した小道に巣を作ったらしい。

外は暗いが、政務宮のほうだけほかに明るく人影がまばらに見える。そちらとは逆の裏手に進

むと、いつそう暗くなつて人影もなかった。

ランタンの灯りで足元を照らしながら歩いていると、俺の右足に恐々と歩くカスパーがしがみついてきて歩みにくくなる。

そして梟^{ふくろう}がいるという小道にたどり着く。カスパーの足がぴたりと止まった。

うす暗い小道に、髪^{かみ}の長いすらりとした人の姿がぼんやりと浮^うかんだのだ。胸に届くほど長い髪で顔を隠し、女か男かもわからない。

「おばけ！」

カスパーが恐怖の面持ちで叫ぶと、俺に飛びついて顔を隠した。尻尾はピンと立ち、獣の耳は後ろに伏せられている。

確かに気味の悪い格好をしているが、あれは幽霊などではないはず。

カスパーがお化けと呼んだ人から、「あつ」と小さな呟^{ささや}きが聞こえる。男の声だ。

お化けは両手と首を必死に振って「ち、違う」と否定した。

「しゃべった!？」

「カスパー。あの子は生きてるよ」

俺とカスパーが近づこうとすると、お化けは後退^{あしひき}って距離を取る。

「どうして、にげるの？」

カスパーが訊いた。

「……君は誰？」

辛うじて聞き取れる、か細い声が耳に届く。

「カスパーだよ。フクロウ、さがしてるの」

「それなら、あっち……大きな木」

お化けは、両手を回しても足らないぐらいの太い大木を指差した。すると葉っぱが揺れる音と羽ばたく音が重なる。

太陽が沈んだ夜の暗闇の空に、大きな翼を広げた白く大きな鳥のシルエットが浮かんだ。今のが梟か。

「にげちゃった？」

「夜行性だから、この時間は餌を求めて狩りにいくんだろう」

飛び立った梟の姿が消えるまで夜空を見上げ、視線を地上に戻すと、お化けのいた場所には誰もいなくなっていた。

「おばけも、にげた？」

まったく音がしなかったのに驚く。逃げ足が速いお化けだ。

++++

翌日。幼少期を過ごした孤児院を、久しぶりに訪ねてみようと思いついた。

十六歳で発情期がはじまってひとり暮らしになっても、成人の十八歳までは孤児院で飯を食べた

り世話になったりしていた。王都を離れる直前まで、孤児院長の計らいで何かとよくしてもらったものだ。

九年ぶりになるのか。

巨大な石造りの王宮楼門を出ると、早速、人型から狼の獣型に変化する。

全身が艶やかな紺碧の長毛で覆われ、鼻は尖り顎は発達し、剛健な四肢の姿に変わった。全身に力がみなぎり解放感に満たされて、大きく伸びをする。

襟のない生成りのシャツと幅の広い下衣は、獣型に変化しても耐えられるようにゆとりがあった。

「行くか」

ひとりそう呟いてから、地面を力強く蹴って疾走した。

獣人は獣型に変化することによって、獣の優れた能力が発現する。人型では不可能な速さだ。

飛ぶように前脚と後ろ脚で駆けると、王都の乾いた風が全身を撫でて心地よい。

高台にある王宮とそれを中心にして広がる王都。

澄み切った雲ひとつない空の下、緩やかな勾配の下り坂を力強く蹴って、凄まじい速さで走り抜ける。規則正しく敷き詰めた石畳の硬い感触を足裏に感じた。

王都の街並みが次第に近づいてきた。王都の大部分は低地で占められ、四季はあるものの一年を通して気温の変化が小さく生活しやすい。

ミナヅキ大通りと呼ばれる人通りが多い商業地区に出ると、さまざまな匂いと軒先に飾られた色とりどりの花、そして人々の活気のある声があふれていた。それを過ぎると石畳の道は狭くなり、

住宅地区になる。

表通りには裕福な邸が多く、裏手には俺がひとり暮らしをしていたようなオンボロ家屋が存在する。貧富の差が激しいのだ。

曲がりくねった路地を過ぎ、あつという間に孤児院に到着した。孤児院の前には、教会とぶどう畑が広がっている。時間が止まったように記憶と変わらない。

「懐かしい」

俺は無意識に呟いた。

人型に戻ってから躊躇いつつ錆びた鉄製の門をくぐると、孤児院の庭にある小さな畑が現れた。俺がいた頃にも育てていた玉ねぎやトマトを見て、遠い記憶が刺激される。

視線を巡らすと、畑の世話する小さな子供たちに交じって、麦わら帽子を被ったニコがいた。孤児院で同室だった男だ。

「ニコ！」

俺が叫ぶと、顔を上げて眩しそうに目を細めたニコが瞠目した。

「ゲリン！　いつ戻ってきたんだ？」

大柄のニコは丸い耳がある熊獣人だ。のんびりとした印象は、今でも変わっていないようで嬉しくなる。

「久しぶり。一か月前から、王宮に住むことになったんだ」

「王宮に？　まさか近衛騎士になれたのか？」

「違う。近衛ではないんだ。護衛兵してる」

「それでも、すごいぞ」

幼い頃から俺のことをよく知っている男に言われると、なんだか照れ臭い。

「ニコは元気だったか？」

「うん。二年前に院長を任されることになって大変だけど、楽しんでる」

前任の院長は引退して遠くに引越してしまったらしい。

俺は畑の手伝いをしながら、九年の間を埋めるようにニコと話をした。

「毎年、ゲリンは孤児院に寄付金を送ってくれてた。ありがたうな」

「世話になったのに、恩返しできなかったから」

孤児院で育った子は、成長すると孤児院の手伝いをして恩を返す。だが俺の場合、たいしたことでもせずに王都を離れてしまった。それが心残りだった。

だから生活に余裕ができてからは、気持ち程度の金額でしかなかったが、孤児院に仕送りをはじめたのだ。

「ゲリンはダイタ様と特に仲がよかっただろ」

アルファとオメガの特別な関係だったとは誰にも知られていない。ニコが言っているのは、あくまでも友人としてだ。

「ダイタ様は孤児院の支援をお父様から引き継がれて、今でも手厚く支援してくださるんだ。二年前に次の院長に俺を推薦してくれたのもダイタ様だよ。視察にもよくいらっしゃる」

「そうか」

「うん。それでね、ゲリンからは連絡のひとつもないってダイタ様が心配してたから、毎年お金を送ってくれる話をしたんだ。寄付があるなら元氣なんだろう、って笑ってたよ」

「——お返しに、孤児院の子供たちからお札の手紙を送ってくれただろ。届いてるよ。ありがとうな」

ダイタの話を超えるために、強引に話題を変えようとする。しかし、ニコはふるふるとかぶりを振った。

「それもダイタ様が支援者になってからはじめてんだ。それに書いた手紙はダイタ様に送ってもらってたんだよ」

「へえ！」

俺は大きな声を出してしまった。

いつも手紙は箱に入れられ、一年に一度、オメガ病院の院長から渡されていた。

ダイタが直接届けていたとは考えにくい、それでも九年間、細い繋がりがあったことに目眩がする。

彼が俺を忘れずにいて少しは思い出すこともあったのだという、小さな証明になったように感じた。

……馬鹿だな。そんなの些細な繋がりで、都合のいい解釈に過ぎないのに。

そうしてニコと話し終えた俺は小さな子供たちと一緒に庭で走り回って遊び、気がつくとき三時間

も経っていた。

孤児院の庭は土を固めただけで遊具も何もないが、広さだけは十分ある。孤児院にいた頃の俺は、ここをとてども広く感じたものだ。

一息ついて名残惜しいが別れを告げた。子供たちとニコが孤児院の門の外まで見送りに出てくれて、皆に囲まれた俺は「また来るよ」と笑顔で返す。

そのとき、ひとりの男の子が大きく両手を振り、その小さな手が偶然通りかかった若い女の肩にぶつかってしまった。

女が舌打ちする。そういう仕草が不似合いな可憐な容姿なのに。

「汚い手で触らないでよ」

女の悪意のこもった声と侮蔑の目は、男の子を怯えさせるのに十分だった。男の子は「ごめんなさい」と謝ったが、女は聞こえてないのか、勢いよく手のひらを振り上げる。

俺は咄嗟に前に出た。

「謝っただろ」

「謝って済むわけではないでしょ。洋服が汚れたじゃないの」

「言いがかりはよせ。汚れてないだろ」

たんぽぽのような色合いの女のワンピースは、どこも汚れてない。

「何言ってるのよ。汚い手で触られたのよ。こんな孤児院、潰すことだってできるんだから」

そうやって理不尽に責め立てる女はこちらを睨み続ける。そしてもう一度舌打ちしたあと、石畳

の向こうに立ち去っていった。

なんて女だ。俺が無然としながら、その背中を見てみると、ニコが嘆息した。

「その青い屋根の邸に住んでる娘だよ。宰相補佐と婚約してから、傲慢さが酷くなった気がする」

「――嘘だろ」

宰相補佐と言えば、俺が会ったレイのことではないのか。それとも補佐官って何人もいるのか。釈然としないまま孤児院をあとにした俺は、ニコが教えてくれた女の邸を何気なく眺めた。王都では一般的な三角屋根がある珍しくもない赤煉瓦造りの住居だ。

「ん？」

俺の獣の耳がぴつと上に向いた。その邸から女の悲鳴が聞こえてくる。それだけじゃなく、争うような物音も。

次の瞬間、衣服の乱れた綺麗な女が玄関から転がり出てきた。後ろからふたりの男が、その女を追いかけている。女はオメガで男たちはベータのようだ。

関わりなくなかったが、追いついた男が女の腹を殴ったのを見て無視でなくなった。

俺は尻尾を低く構えて素早く駆け寄り、円を描くように回転して、男の鳩尾めがけて回し蹴りを喰らわした。

間髪容れずに残るひとりに肉薄し、男のこめかみを右の拳で殴りつける。その場でくたくたと崩れ落ちた男の胸ぐらを掴み、もう一方の男に向かって投げ飛ばした。

勝ち目がないと悟ったのだろう、男たちは小さく悲鳴を上げると、怯えた様子で逃げていった。

その背中を追いかけたほうがいいかとも思ったが、うずくまっている女のほうが心配だった。

そばに駆け寄って顔を覗き込む。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます」

礼を口にした女は、腹を押さえながら痛みに耐えていた。可哀想に。女は発情期かもしれない。「危ないところだったな。今のは知り合いか？」

「いいえ。知らない男たちでした。勝手に家に入ってきて……たぶん妹の仕業です」

まさか孤児院で悪態をついていた女が、その妹じゃないだろうな。どんな事情があれば、発情期の姉を襲わせようと男を招き入れたりするのか。

結局、何事かと顔を出した隣人に女を預けて俺はその場を去った。

なんとも後味の悪い気分だ。あの女、容姿はいいかもしれないが意地が悪い。

あんな女と婚約する宰相補佐は見えないとしか思えない。俺が知っている宰相補佐官レイの婚約者だとは信じがたかった。

腑に落ちない気持ちのまま、俺は獣型に変化して王宮に戻ったのだった。

その日の夜、お化けに再び会えるだろうかと思い、同じ時刻に梟の木の下にひとりで行ってみた。長い髪のお化けが誰だったのか、時間が経過するにつれて不審に思うようになったからだ。

暗くてよく見えなかったが、お化けは制服を着ていなかった。王宮の中で制服を着用してない者となると、かなり限られてくる。

ところが、残念ながら木の周辺には誰の姿も見当たらない。梟の「ホッホッ」という鳴き声が夜の闇に響くだけだ。

ランタンを地面に置いた俺は、腰を下ろしてお化けの登場を待った。脚を交差させて、尻尾を膝の上に乗せる。

しばらくして少し眠くなったところで、諦めて引き返そうと立ち上がった。

——と、そのとき、視線を感じて背後を振り返る。

遠くの茂みから銀色の髪を出して、こちらをうかがっているお化けがいた。あれは、隠れてるつもりなのか。

また逃げられては困る。すぐに近寄りたいところを、じっと耐える。

それなのに、お化けの気配はすぐに消えてしまった。

警戒心の強いお化けだ。今度、見つけたら逃げる前に捕まえよう。

俺はそう決心した。

翌日。

俺は妃教育の終えたマイネがいる応接間に、紅茶と菓子を運びこんだ。

俺の業務ではないが、宰相補佐官の婚約者だという女のことになって、レイと話がしたくて

侍従に変わってもらったのだ。

応接間の壁は聖獣をモチーフにしたような絵画が掛けられ、洒落たキャビネットの上には白い小さな花が飾られている。

木製の書棚には国政に関する書物が整理されて収まり、洗練された控えめな印象の部屋だ。

その部屋の中央に白い机と椅子があり、都合のいいことにマイネの姿はなく、レイだけがいた。

俺はレイの前に青磁のティーカップを置いて紅茶を注ぎ、林檎と洋梨のシロップ漬けを横に添える。

「ありがとうございます」

黒眼鏡のフレームを眉間で上げるレイの手の甲は、文官らしい滑らかそうな肌で綺麗だった。

俺は何気なさを装い、早速訊いてみることにした。

「レイ様が宰相補佐官だと聞いてから、少し気になっていたのですが、宰相補佐官ってレイ様以外にもいるんですか？」

「いません。補佐官と呼ばれるのは、私だけです」

俺はゆっくりと瞬きをした。心中は穏やかではない。

「もうすぐ結婚されるそうですね？ ハンさんから聞きましたよ」

「はい。来月に教会で挙式する予定です」

切れ長の目をいっそう細めて笑顔になるレイを、俺は無表情で視界に入れる。

「もしかして、お相手の方も文官ですか？」

「いいえ。親の商会を手伝っている女性で、家族思いで優しい人なんです」

まさか、あの女が優しいわけがない。宰相補佐の婚約者だというのは嘘なのか。

レイの前では優しい女を演じているとも考えられるが、あんな女を優しいと感じるほど宰相補佐官は馬鹿なのか。

俺は曖昧に笑って聞き流した。レイの婚約者が別の優しい女であることを願う。

部屋を退出すると、政務宮に行きハンを探す。そしてルシャードの執務事務室で、ハンにレイの婚約者について調査してほしいと、理由は伏せて頼んだ。

レイはマイネの教育に適していないかもしれない。

金ノ宮に戻る途中もそんなことを考えながら歩いていた。そのせいで、こちらに向かってくるダイタに気づくのが遅れた。赤い髪を認識したときには、引き返すのは不自然な距離だった。

王宮に住むようになってから、会うのは三回目になるのか。

ダイタに極力会わないように努めていたが、意識しているのは俺だけかと思うと馬鹿馬鹿しくなり、どうしていいのかわからなくなる。

ダイタの濡れたような黒い瞳は、じっと俺を見ていた。

「ゲリン、ちょっと話があるんだけど、今いいか？」

「はい」

返事をして、仕方なく政務宮の廊下で立ち止まる。ダイタは気のよさそうな笑みを浮かべた。

「ゲリンも近衛騎士の訓練場に来て、騎士たちと一緒に鍛錬してみないかと思ってな。毎日とはい

かないが、どうだ？」

「——え？ いいんですか？」

かなり予想外だ。

ダイタが団長を勤める近衛騎士団は、王族を守るために存在する。そのため、精鋭と呼ぶに相応しい者ばかりが在籍し、王宮の外れに設けられた広大な訓練場で日々鍛錬に励んでいた。

そこに、俺が参加してもいいのか。

「ああ。ルシャードの許可はもらってるから、いつでも来ていい。でもひとつだけ条件がある」

「なんですか？」

「発情期に近い時期は、参加できない」

ダイタが言いづらそうに口にするが、それは当然だろう。

「……それだけですか？」

「それだけ守ってくれたらいい……なあ、やつぱり昔みたいな喋り方に戻せよ。むず痒くてしょうがない」

一瞬、遠くを見るような眼差しを見せたダイタに、俺はわざと淡々とした様子で返す。

「もう九年も前の話です。忘れました」

「忘れたか……酷い奴だな。お前は別れの挨拶もなかった酷い奴だって思い出したわ」

ダイタは苦笑した。

別れの挨拶をしなかったのはダイタにも原因がある。ダイタは気まずくないのだろうか。

確かめたことはないが、発情期に慰めたオメガは俺だけではなかったのかもしれない。関係があったオメガのひとりではないのなら、ダイタの態度にも説明がつく。

そう思うと、胸が締めつけられるように痛かった。

「そんなことより、近衛^{このえ}の鍛錬に参加できるようにしていただいて、ありがとうございます」

「実力がある奴が参加してくれれば近衛^{このえ}の士気が上がるし、ゲリンもひとりで鍛錬してばかりでは感覚が鈍るだろ」

それに答えようとしたとき、後ろから気安く肩を叩かれた。振り向くとオティリオだ。俺とダイタの会話に割り込むように彼は口を開いた。

「なに？ ゲリン、騎士に交じって訓練するの？」

いつから聞いてたんだ。訝^{いぶ}る俺の代わりにダイタが答える。

「ゲリンにも参加してもらおうと思って、誘ったところだ」

「面白そうだね。ゲリンが参加するときは僕も見学に行こうかな。ゲリンが試合をするところ、見てみたい」

「来なくていいですよ」

素っ気なく返しながらも、夢だった近衛^{このえ}騎士に交じっての鍛錬に心が騒ぐ。

「ゲリン、嬉しそうだね。尻尾が揺れてるよ」

オティリオが押揃うように俺の獣の耳を撫でた。オティリオはふさふさとした獣の耳と尻尾が好きらしく、俺の耳と尻尾の意味もなく無遠慮に触ることがあった。

耳全体には短い毛が密に生えているから、触れるとしつとりとして柔らかいのだろう。

「ああ。もう触らないでください」

オティリオの手から逃げるように、無意識にダイタの背中側に回った。長身の広い背中が俺を隠す。

その背中を捻って軽く頭を下げたダイタの顔が、俺に向けられた。

「午前は基礎練しかしないから、試合がしたいなら午後に来るといい。久しぶりに俺とも剣を合わせてみないか？」

幼い頃、俺とダイタはともに近衛^{このえ}騎士から剣技を学ぶことがあった。僅差だったふたりの力は、ダイタが成人してからどんどん引き離されていき、俺が勝つことは滅多になくなっていった。

それでも、ダイタと剣を交えるのが好きだった。

オメガであると判定されても鍛錬をやめずに続けられたのは、ダイタという存在があったからかもしれない。

記憶を呼び起こした俺は、無意識に微笑を浮かべた。

「団長じきじきに手合わせしてもらえるなんて光栄です」

至近距離で俺と目を合わせたダイタは、何か言いたげな仕草をしたが口を閉ざしたままだ。

剣を交えている間は、自分がオメガであることも、ダイタがアルファであることも忘れられた。

五感を研ぎ澄まし、ダイタの息遣いと俺の息遣いが重なる感覚が好きだった。技を競い合うようにして勝負をした記憶がまざまざと蘇る。

あの時間が好きだった。ダイタも俺と同じ気持ちだったらしいのに。それに、騎士団長となったダイタの指導を近衛騎士に交じって受けられるのは、オメガの俺にとっては予期せぬことで、とても嬉しかった。

++++

それから十日後。マイネの妃教育の日。

いつも通り午前中に金ノ宮を訪問したレイが、玄関ホールで申し訳なさそうに頭を下げた。

「急用ができましたので、本日の授業の日程を変更させていただきたい」

どうしたのか、婚姻に関する書類を本日中に王宮に提出するように迫られたらしい。

今から婚約者の住む邸まで急いで行かなくてはならないという。

しかも、なぜかルシャードから指示があり、俺もレイに同行するように命じられた。

婚約者とレイの様子を確認してこいって意味だろうか。レイは不審そうにしたが、俺にも理由がわからないと誤魔化しておく。

レイの道案内に従って王都を二十分ほど歩き、見覚えのある青い屋根の赤煉瓦邸に到着した。

俺は密かにため息をついた。違っていてほしかったが、これでレイの婚約者があの女だと確定したな。

俺が助けた姉だという女がちょうど玄関扉の外にいて、レイが声をかけた。

「急にうかがってすみません。アイリスはいますか？」

婚約者の名前はアイリスらしい。

「アイリスなら部屋にいます。どうぞ。私は出かけるので失礼しますが、部屋まで上がってください。さって結構ですよ」

姉が家の中に入れてくれた。

玄関ホールは狭いものの、使用人の姿もあり、なかなか裕福な暮らしがうかがえる。

「せっかくなので、ゲリンさんに婚約者を紹介しますよ」

そう言ったレイのあとに続いて深みのあるブラウンの階段を上がると、突き当たりに位置するアイリスの部屋の前まで来た。

……ところが。

白い扉の向こうから聞こえるやり取りに、俺とレイは動けなくなった。

真つ昼間から男女の卑猥な音と甘ったるい会話が続き、俺の背中に冷や汗が流れる。婚約者の裏切りが扉を隔てて生々しく伝わってきた。

立ち竦んでいるレイの表情は、もう怖くて見ることができない。

レイが聞いているとはつゆ知らず、最中の女は耳を塞ぎたくなくなるような声を上げた。やめてくれ。それをどんな気持ちでレイが聞いているのか。

「アイリス……」

呆然とするレイが、婚約者の名を呟いた。

そして苦しげに息を吐いたかと思うと、決心したかのように扉に手を伸ばし、勢いよく開けた。
——俺はこのまま帰りたいかったのに。

正面の壁際にある寝台の中で、女が突然の闖入者^{ちんにうしや}に驚き、次にそれが誰なのかに気づくと同時に、血相を変えて覆い被さった男を押し退ける。
静まり返ったのは一瞬だけ。

レイが部屋の中に一步入ると、アイリスが言い訳をしはじめた。

「違うの！ 無理やりお義兄さんに襲われたの！」

怖い女だ。浮気をしていたことさえ驚きなのに、相手の男が義兄だとは。姉を襲わせたのも、そんな事情があったかと思うと、ぞっとした。

彼女は迫真の演技で震え出したが、押されて床に転がり落ちた男は、打ちつけた腰を手で押さえながらも慌てて否定する。

「嘘だ！ 最初に誘ったのはアイリスだ！」

部外者の俺はここにいってもいいのだろうか。しかしレイをひとりにもすることもできず、部屋の外で成り行きを見守るしかないが。

「レイ、信じてくれないの？ 私が浮気するわけじゃないじゃない」

裸体の女がそんなことを言っても説得力はない。しらを切るつもりなら、呆れてしまう。

「信じるわけないだろ。俺は扉の前で聞いてたんだから。いつから浮気してたんだ？」

レイの反応は至極当然だった。

女の表情が苛立ったように歪み、長い息を吐いたあとに本性をさらけ出した。

「はあ……面倒くさっ」

「なんと言った？」

アイリスの変化を目の当たりにして、レイは眉を顰める。

「謝っても、許してくれないんでしょうか？」

「当たり前だ！ 許すわけないだろ！」

感情的になって怒鳴ったレイを、馬鹿にしたようにアイリスが笑った。

「簡単に騙された、あんたも悪いのよ」

挑発するような口調だった。婚約者だった優しい女など存在しなかったのだとレイは愕然としているはずだ。可哀想に、騙されて幻を見ていたのだ。

俺は内心でため息をつく。

すると突如、ピリピリと部屋中が小さく振動しはじめた。

ついで、アイリスの周囲にだけ黒いモヤが漂う。

得体の知れない力に「何これ？ やめて！」とアイリスが叫ぶが、レイは黙ったまま微動だにしない。

——これは、アルファの威圧フェロモン！

上位とされるアルファの中には、ベータとオメガの行動を一時的に支配する『威圧フェロモン』を発せられる者がいる。

まずいかもしれない。俺にも何が起きているのかわからないが、明らかにアイリスの呼吸が苦しそうで、目の焦点がおかしい。

このまま続けたら恐ろしい結末になる。

「駄目だ、レイ！」

俺が叫ぶと、ふっと威圧フェロモンが消滅した。

すぐにアイリスの呼吸は戻ったようだが、わなわなと震え出し、自分自身を抱きしめるように腕を回す。少なくとも、今は冷静に話し合いができる状態だとは思えない。

俺は動揺しているレイを引きずって邸の外まで出た。今はふたりを引き離れたほうがいい。

「……すみません」

レイが呟く。懸命に冷静さを取り戻そうとしているけれども、かえってそれが痛々しい。レイはアイリスの言葉に深く傷ついていた。

「レイ様が謝る必要なんてないです」

「でも、巻き込んでしまったから」

頭を支えながら手のひらでこめかみの辺りを触れたレイは、何かを振り払うように小さく首を振った。

「何言ってるんですか。大丈夫ですか？ とりあえず帰りましょう」

俺は、次第に項垂れていくレイを連れてなんとか王宮まで戻り、王宮の奥にある寄宿舎まで送った。役職付きのレイの部屋は、最上階にあった。

玄関に一步入ると安心したかのようにレイは動かなくなり、不意にオリーブ色の目からぼろぼろと涙がこぼれた。

「あれ？」

レイは頬に落ちた涙を指先で拭い、不思議そうな声を出す。

一度涙があふれ出すと、止まらなくなった。

「おかしいな」

狼狽するようにレイが呟く。

あんな女とも知らず、騙されて好きになってしまったレイ。拳ひとつぶんぐらい背の高いレイの悲しそうに泣く顔を見ていられなくなった俺は、彼の顔を隠すように腕の中に抱きしめた。

レイの黒髪は見た目よりも硬くはなかった。

「レイは何も悪くない」

泣きたいだけ泣けばいい。泣いて忘れてしまえ。

別れて正解だ。結婚前にわかってよかったじゃないか。

そんな言葉が次々に浮かんだけれど、どんな慰めも白々しく思えて、結局口にすることはできなかった。

レイは俺の肩に頬を寄せて声を殺して泣いた。そんなレイの涙が止まるまで、俺はそっと寄り添うことしかできなかった。

レイのアルファの匂いがした。それは陽だまりのような暖かさを感じる匂いだった。